

ギネス女王・斉藤志乃ぶの“私のボウリング人生”——後編

「難しいと思うけど、“次の1勝”を
味わってみたい気持ちはあります」

どんなに傑出した記録を誇っていても、斉藤志乃ぶプロとて生身の人間だ。人知れずプライベートな問題で悩んだり、スランプにもがき苦しみながら歩んできた道のりの先に、今の自分がいる。そしてこの先も、まだまだ道は続いていく——。



▲V60を達成した92年にABS主催で開催された祝賀パーティーで謝辞を述べる志乃ぶプロ(8月27日、品川プリンスホテル)

前人未到の道を征く

デビュー11年目の1981年(昭和56年)、志乃ぶプロは初めて年間未勝利の屈辱を味わう。いったい何があったのか。当時はプライベートでいろいろあって…。試合に行けばゲームに没頭して、イヤなことも忘れられるかと思ったけれど、そんなに簡単なことじゃなかったですね(苦笑)。

心の傷が癒えるには、それ相応の時間が必要だったのだろう。それでも明けない夜がないように、志乃ぶプロは徐々に本来の姿を取り戻して行く。翌82年6月にはアメリカへ遠征してUSオープンで制し、帰国後もシーズン終盤に3勝の固め打ち。気が付けば同年は国内の全試合で入賞し、年間アベレージも初めて200の大台を突破するなど、完全復調を果たしていた。

83年は1勝にとどまるも、84年には4勝してV40に到達。そして85年8月には、当時42勝で歴代トップの座にあった須田開代子プロ(1期)に、ついに肩を並べる。

単独トップに立つ43勝目を挙げたのは、同年12月の第8回プリンスカップ。くしくも須田プロが創設したJLBC(ジャパンレディースボウリングクラブ)主催の大会だった。

以後、志乃ぶプロは前人未到の道をひとり突き進んでいくことになる。勢いは衰えず、86年からの5年間でさらに14勝を積み上げ、国内通算勝利数は57に。その内訳には88~90年の全日本女子プロ選手権3連覇(通算7勝)も含まれる。V50(87年11月に到達)はたんなる通過点に過ぎなかった。

80年代は、トーナメントに向かう姿勢などがしっかりできてきた時代でした。人間的にも少し成長して、選手会の幹事

を務めたりとか、業界全体にも目が向くようになりました。

選手としては須田さんの数字を抜くことが目標でしたが、須田さんは当時から業界のために尽力していて…。その立ち居振る舞いとかを見て、自分なりに勉強もしていたけれど、ただただ「すごい人だな」と(苦笑)。

90年代に入り、年齢が40歳半ばを過ぎても、志乃ぶプロは圧倒的な強さを発揮し続けた。

新しい目標という意味では、デビュー2年目からお世話になっているABSの渡邊保会長が「次は60勝のパーティーやるよ」とか「早く70勝してよ」なんて、お会いするたびに声をかけてくださって(笑)。そういう区切りの数字には意識を置いていました。

あとは、毎試合ピッチを変えたりもしていましたね。何かを変えて、それに没頭することで自分の気持ちをつなげていければと思ったんだけど、実は飽きっぽい性格なだけかも(笑)。飽きっぽいし短気。変えて結果を出すのが楽しくて。アドレスを変えたり、マングース(リストタイ)を着けて投げたこともありました。



▲92年群馬オープン優勝時の志乃ぶプロ。地元で63勝目を挙げた(11月22日、桐生スターレーン)

そうした「守りに入らない」姿勢も相まって、志乃ぶプロはV60に到達した92年、46歳にして年間6勝を達成。これはプロ5年目の75年と並ぶ自己最多タイの記録だが、試合数は当時より7減っていた(23→16)ことを考えると、まさしくキャリアハイの数字といえるだろう。

ちなみに、80年代半ば以降の最盛期、ライバルとして台頭してきたのは、金田恵子(5期)、時本美津子(7期)という、ともにデビューから初勝利まで10年以上を要した遅咲きの2人だった。

私、時本さんには優勝決定戦で10回勝っているんですよ。球筋(ライン取り)が似ていたから、成績がいいときは2人ともよくて、対戦することが多かったんです。このごろは「もし私がいなかったらとくに40勝を超えてるのに、ゴメンね」なんて、笑いながら話しますけどね。

反対に金田さんとは球筋が違って、打てるコンディションも違ったので、決勝で当たった数は案外少ないんです。

イップスとの闘い

93年、順風満帆だった歩みが突如鈍り始める。上位入賞はしても優勝には届かず、未勝利のまま迎えた最終戦の全日本女子プロ選手権でも、トップ進出した決勝ラウンドでまさかの失速。僅差の準Vに泣き、81年以来2度目の年間0勝に終わる。このとき、最大11マーク差を大逆転して優勝を飾ったのは「球筋が違う」金田プロだった。

この敗戦が尾を引いたのか、翌94年以降、志乃ぶプロはイップスに悩まされるようになる。

「心に傷が入っちゃった」みたいな感じなんですけど、アドレスしても足が前に出ていかない(苦笑)。

そのころ「斉藤志乃ぶはどうやってダメになっていくんだろう?」と考えたこともあります。「ケガをするか、重篤な病気になるのかな」なんてね。それまでダメになっていく自分を想像したことがなかったから、怖かったですね。

「それでもちょこちょこ優勝することができた」のは、まさに底力の証だろう。年間1勝するかしないかで大きくペースダウンはしたが、2002年にはついに国

内通算70勝に到達する。しかもその舞台となったのは、通算10度目の優勝となる全日本女子プロ選手権だった。

選手として積み上げてきた偉大な数字は、否応なくプロ協会内での立場も引き上げていった。長く理事職には就いていたが、02年からは石川雅章、中山律子両会長の下で副会長を2期務める。万全でない体調で要職にあったことも一因となったか、07年には再びイップスを発症する。

2度目のときは重症でした。ボールを持って歩き始めると、毎回転びそうになるくらい怖くて…。ひどいときはもう、自分の心の中で実際に転んでしまったほうが良いとさえ思うようになっていました。

永久シードの葛藤

最後の優勝(国内通算72勝目)は05年のジャパンオープン。

永久シード権を行使して毎年10大会前後のレギュラーツアーに参戦しているものの、イップスとの長い闘いもあって、以後は今日まで未勝利のシーズンが続いている。

すでに古希を過ぎていることを考えれば、それも当然の結果だろう。

ゴルフの杉原(輝雄、11年没)プロが永久シードで、晩年もレギュラーツアーに出ていたけれど、成績は必ず下のほうだった。あるとき、ゴルフをやっている弟がテレビで杉原プロを見て「出て勝てないんだから、若いヤツに道を譲ってやればいいのに」と呟いたのを聞いて、「私も周りのプロからそんなふうに思われているのかな」なんて思ったりして(苦笑)。

正直、葛藤はありますね。とくに推薦をいただいて少人数の大会に出るときは、すごく考える。自分が出ることでウエーティングの若い子が必ず1人、弾かれるわけですから。それは今の自分にまったく自信がない証でもあるし…。

「還暦を過ぎたころに『今さら昔みたいなボウリ

ングをやろうなんておかしいでしょ』と思う自分がいたこともある」と志乃ぶプロ。だが、自分がボウリングを楽しむためだけに真剣勝負のアプローチに立つわけにはいかないという、トッププロとしての矜持は失っていない。

ボウリングは生涯スポーツであり、永久シード権は自身の努力で勝ち取った立派な権利。今も200台(202.17)の生涯アベレージをキープしている志乃ぶプロに、恥じるべきものはない。



▲93年の全日本女子プロ選手権敗れて涙する女王の姿は衝撃的だった(12月18日、京都スターレーン)

イップスで悩んだころよりは、ずいぶんマシになって、今はいづから自分のボウリングができそうに変わってはきています。現実的には難しいと思うけど、「次の1勝」を味わってみたい気持ちはあります。

チャンスは大いにあるだろう。コロナ禍で今年は中止になってしまったが、ラウンドワンランドチャンピオンシップにはグラウンドシニア部門があり、そこでの優勝は通算勝利にも加算される。

そうですね。去年は時本さんに2つ(JPBA決勝大会とファイナル)持っていたからね(苦笑)。

ちょっぴり悔しさをにじませた表情を見て確信した。斉藤志乃ぶはまだまだやれる!

<完>

さいとう・しのぶ / 1948年9月5日生まれ、群馬県出身。161センチ57キロ、右投げ。71年プロ入り(3期・ライセンスNo.64)。通算74勝(米国での2勝含む)。公認パフェクト3回。米アメリカンボウリングサービス(ABS)所属。